

## ユビキタス化された社会における「音楽の基礎・基本の力」の問い直し(2)

—子ども自身の「思考を伴ったイメージング・プロセス」を活用した授業実践—

新山王 政 和 (創造科学系音楽教育講座)  
今 泉 美貴子 (額田郡額田町立宮崎小学校)  
磯 部 妙 子 (額田郡幸田町立幸田南部中学校)  
(2004年10月5日受理)

### Re-consideration of the basic & foundations of the music in UBIQUITOUS

— viewpoint from the lesson using Imaging —

Masakazu SHINZANOU (Department of Music Education)  
Mikiko IMAIZUMI (Nukata-Miyazaki Elementary School)  
Taeko ISOBE (Kouta-Nanbu Junior High school)

**要約** 今日のユビキタス化された社会では、様々なことを気軽にバーチャル体験できる反面、自分自身の力で考え結果をイメージングしようとする機会が失われてしまっている。生きる力の問題としても、脳科学や発達教育科学の分野からこれに対して警鐘が鳴らされている。よって小・中学校音楽科の授業という視点から、次の2点を視野に入れてこのユビキタス社会における音楽の基礎・基本の力について改めて考察してみたい。

1. 過度に視聴覚機器に頼ることをやめ、イメージングを通じて活きた活動体験を模索する
2. 活動の主体を子どもへシフトし、教師が言語・非言語指示を駆使して一方的にリードした為に子どもが思考停止の状態や指示待ちの状態のようになってしまふことを、イメージングを活用した活動体験によって防ぐ

今回の一連の授業研究では、この二つのポイントを視野に入れながら、実体験と体感を伴った子ども自身によるイメージングの活動を基盤に据えた授業のあり方について模索してみたい。そして本論文においては、次の二つの授業実践を取り上げて分析を行った。

1. 小学校4年生を対象にした授業：楽曲の構造からショートストーリーをイメージングし、それを伝える為の演奏表現とリコーダー演奏技法を工夫する
2. 中学校3年生を対象にした授業：歌詞のイメージングに基づいて、自分達が歌いたいと感じる表現を考え、それを演奏表現できるような歌い方を工夫する

**Keywords**：音楽の基礎・基本、イメージング

#### 1. 研究の背景と問題の所在

IT分野から端を発した「ユビキタス」化は教育の分野にも清濁良否両面の影響を及ぼし、中でも今日では子どもの実体験の不足から生じたイメージングの不足が新たな問題として注目されるようになってきている。このイメージングとは、本来、それ以前に自らが経験し蓄積した「原体験」と「知識」を集大成して自分なりのイメージを新たに構築するプロセスである。例えば、映像を見てそれに驚いたり感動したり、癒されたり嫌悪感を抱くのは、その映像が表現している背景や場面・状況と同一の体験かあるいはそれに通ずる類似体験を予め持っている、それら一連の原体験から類推し再構成することによって新たに自分なりのイメージを形成した結果である。つまり、見る側・受け手の側の原体験や知識の範疇内でしか、「本物・本当」のイメージとは形成されないことになる。

しかし今日では、このような複雑な精神活動のプロセスを経ることなく、多くの場面でバーチャルに疑似

体験を行うことができるようになり、その弊害は脳科学や発達教育科学の分野で問題視されている。もしこれを放置すれば芸術の分野の問題だけに止まらず、原因からその結果を導き出すような所謂社会生活上必要なイメージング力や、一つの現象からその影響や効果、結果までを類推するような生きていく上で必要なイメージング力まで衰えてしまう危険性を否定できない。現実に教育現場に於いては、自分で考えたり想像したりすることよりも、結果や答えだけを手早く求めてしまう子どもが少なくないことに多くの教師が悩んでいる。あるいは、結果を考えずに行動してしまったり、なぜそうするのか分からないままに行動してしまう等、自分自身で考えて自分の言動を制することができない子どもが増えていることも衆知の通りである。

文部科学省もこの問題を注視しており、「脳科学と教育」研究プロジェクトの一環として、PC等が脳機能に与える影響やコミュニケーション能力の発達等との関連について、医学や脳科学、教育の専門家によっ

て調査・解明する大規模プロジェクトが平成18年度より本格的に開始される予定である\*1。このプロジェクトの統括責任者を務める小泉英明氏は「無数の神経ネットワークの多くは小さい頃からの実体験の刺激をベースに作り上げられる。視聴覚だけのバーチャルな体験は、実体験ほど複雑でバランスのとれた総合回路を作り上げるわけではない。極めて単純な回路しか働かないことも考えられる」と述べている\*2。また既にアメリカやヨーロッパの一部では、視聴覚刺激だけが一方的に流されてしまうテレビを2歳までは見せない、という考え方が一般的になりつつある\*3。

## 2. 音楽科の基礎・基本の力としてのイメージング

これまで多くの視聴覚機器に頼ってきた音楽教育の分野でも、このユビキタス化された社会において子ども自身の実体験をどのように確保していくのか、今後真剣に問い直さなければならない。例えば従来からのビデオ情報にだけ頼り切った実践や、最近のPCを用いた音楽創作や合唱やオーケストラ等のバーチャルな演奏体験、PCを援用して知識や技術を習得させたりインターネットを通じた演奏交流の実践等、「ユビキタス」を駆使した実践が多く試みられている。しかし、このような一見「いつでも、どこでも、誰でもできる」便利な社会であるからこそ、少なくとも生身の人間と人間が触れあう小学校や中学校の音楽科の授業においては「自らイメージを膨らませ、イメージを形成する」ことによって子どもの思考プロセスを刺激し、その活動を通じて音楽構成要素にも自ら気づき、それを知り、それについて考え、その技術身に付けていきたいと感じるような授業、つまりバーチャルな疑似体験だけでは成し得ない自らの実体験を通じたイメージングを誘発するような実践を志向していきたい\*4。

## 3. 愛知県額田郡教育研究会音楽部授業研究会における授業実践の分析と考察

今回の一連の研究では、筆者が参加する機会を頂いた授業研究会において実施された研究授業を対象にして、筆者が企図する「イメージングを通じて音楽の基礎・基本の力を身に付ける」と「子ども自身の思考プロセスを重視した活動の構造化」の二つの視点から分析と考察を試みている\*5。

なおそれぞれの授業実践は各授業者が独自に研究・立案し実施したものである。

### 3. 1 小学校4年生を対象にした今泉氏による授業

今泉美貴子教諭が行った小学校4年生を対象にした「ふしの感じを生かして」の授業を取り上げて分析と考察を行う。授業は事前によく研究・計画され、研究授業でも子どもと教師が関わり合う場面が工夫されて有意義な実践であったが、本研究では敢えて分析的・

客観的な視点からのみ掘り下げる。

これまで多く見られた教師が一方的に指示を出しながら演奏を組み立てていく授業とは異なり、今回のように子ども自身に演奏表現からその演奏方法までイメージングさせる実践は教師側の苦勞が多い割には見た目の華々しさに欠けてしまう。しかしそれは、形として出来上がったミュージックを体験させたいのか、楽曲に対するイメージングやそれを具現化する為の演奏技法を模索するという思考プロセスを体験させたいのか、その教師の音楽教育観に因るものであろう。その意味からも研究授業に於いてこの実践を試みられたことを評価したい。なお紙面の都合上、授業の内容については必要な部分しか記述できないので、ここに記した以外については授業者が執筆した研究集会紀要を参考にされたい\*6。

#### 3. 1. 1 授業の設定

(1)主題: 「ふしの感じを生かして」: 曲「陽気な船長」

(2)主題の目標

- ・自分で曲の雰囲気を考え、レガートやスタッカート等を生かして表現の仕方を工夫することができる。(この単元で育てたい力)

- ・曲の雰囲気を感じ取って想像豊かに聴いたり、歌ったり、演奏したりすることができる。(基礎・基本)

- ・友達と一緒に演奏の工夫をしながら、友達の発想の良さに気付いたり、自分の発想や技術を高めたりすることができる。(創造的な活動の目標)

(3)本時の目標

- ・二人で考えた「陽気な船長」に合う演奏を工夫し、発表することができる。

- ・発表したり、発表を聴いたりしながら友達の発想の良さに気付いたり、自分の発想や技術を高めたりすることができる。

(4)評価

- ・自分達が考えた「〇〇な船長」に合わせて、レガートやスタッカート(必ずしも使わなければならない訳ではない)等を生かして表現の仕方を工夫することができたか。

- ・発表したり、発表を聴いたりしながら友達の発想の良さに気付いたり、自分の発想や技術を高めたりすることができたか。

(5)本時の視点

- ・[グループの分け方について] 教師が、能力の似通った子ども同士で二人組を作ったことは、一人ひとりの発想がお互いに出しやすく受け入れやすくなることに有効であったか。

- ・[練習の場と発表方法について] 二人練習の場所を、それぞれ離れた場所で行うようにしたことは、自分達の演奏を聞いてもらう意欲や、他組の演奏を聞く意欲を高めることに有効であったか。

演奏を、1回目は二人の発想を言わずに、2回目は二人で考えたストーリーや演奏の工夫を伝えてやったことは、二人の思いが本当に通じたかどうか、感想やアドバイスを引き出すことに有効であったか。

・[形成的評価の取り入れについて]二人練習の時や、発表時の気づき等、子どもの発想や工夫の良い点を褒め、励ましたり、本当にそれで思いが伝わるかどうか聞き返したりしたことは、子ども達の意欲を高めたり、考えを深めさせたりすることに有効であったか。

(6)準備する物(教師)：スタッカート等の記号を削除した「陽気な船長」の楽譜

(7)準備する物(児童)：ソプラノリコーダー、プリント、イメージを表現した画用紙

(8)対象児童：愛知県額田郡額田町立宮崎小学校第4学年8名(男子4名、女子4名)

(9)研究授業実施日：平成16年6月30日

### 3. 1. 2 授業の概略と注目したいポイント

授業は次のような構想で行われた。なお筆者が注目した活動や指導には下線を加えている。

題材の「陽気な船長」はA-B-A'の形式で作られた曲であり、それぞれA部分・B部分・A'部分に相応しいショートストーリーを子どもにイメージさせ、それを具現化する演奏方法も工夫させる。そこで考えた演奏方法をイメージ図(図形楽譜)に置き換えて記録し、発表の際にはショートストーリーとこのイメージ図を同時に示してその雰囲気が伝わる演奏ができたかどうかをクラス全体で話し合い、感想やアドバイスを発表し合う。これにより、自分なりに曲のイメージを抱いて演奏に臨んだり実際に曲から様々なことをイメージングすることや、それを表現する為の演奏方法や演奏技法を自ら身に付けようとするだけでなく、自分の目線で演奏を聴こうとするモラルを育てることも可能になる。

実際の授業では、グループ練習とその発表、それを受けた話し合いが次のような流れで進められた。

(1)全員で「陽気な船長」を階名で歌い楽譜を確認した後、リコーダーで演奏する。子ども達へ演奏の具合について問い掛け、問題が無いことを確認する。

(2)前時迄に各グループ(二人ずつ×4グループ)で考えた演奏表現が聴いている人へ伝わるような演奏の工夫をすること、授業の後半にそれを発表することを説明し、解散する。

(3)各グループで練習。それぞれの練習場所を回って、演奏表現への考えのまとめ具合を窺う。

(4)グループごとに発表する。発表は次の段取りで行われた。演奏は原則2回。最初に何も情報を説明しない状態で演奏し、聴取者側がその演奏からどのようなイメージを抱いたかを話し合う。続いてイメージングした状況設定と演奏の為のイメージ楽譜(図)を説明し

てから再度演奏し、発表者側が意図した状況設定が巧く演奏表現されているか、全員で意見を出し合う。

(5)自分の演奏の反省や感想、他のグループへのアドバイスや感想をノートに書かせて授業を終える。

次に、各グループがイメージングしたショートストーリー(以下STと記す)とそれを表現する為に考えた演奏方法(以下、演奏法と記す)を、A部分・B部分・A'部分にまとめておく。さらに聴取者側から出された感想とアドバイスも主なものを整理しておく。

(1)S.& Y.グループ

A:[ST]船に乗って海に行きました(楽しみ)

[演奏法] \*記入無し

B:[ST]魚を釣ったらいっぱい獲れた(やったー)

[演奏法] タッタッタッタッタッタをだんだん速くする

A':[ST]家に帰って食べた(おいしい)

[演奏法] タータータター、ターターター。ゆっくり味わう

\*最初に聴取者側から出された感想

Aが速くてBが跳ねる感じA'はゆっくりだから、最初は旅に出る感じで最後は極楽という感じ。Aは走っている、Bはジャンプ。Aは速く、Bは針の山に刺さる、A'はゆっくり。

(発表者がショートストーリーを説明し、それを聴いた上で改めて演奏を聞く)

\*感想とアドバイスの交換

A'の魚を食べる部分が極楽気分でもよかった。A-B-A'の違いがよく分かった。教師からどんな違いがあったか問いかけがあり、そこで出された「速くやったりゆっくりやったり」の意見を全員で演奏して試してみた。A'の部分の吹き方について「ゆっくり吹くべき/飛び跳ねる感じで吹くべき」という意見の交換があり、極楽気分を出したいのだからゆっくりでいいという意見に落ち着く。

(2)Y.& M.グループ

A:[ST]船に乗って海に出たら魚が元気に泳いでいたから船長さんも元気になった

[演奏法] 最初は小さくどんどん大きく。ターターター、ターターター

B:[ST]力が湧いてぐんぐん島に向かった

[演奏法] 音の大きさは普通で、タッタッタで速く

A':[ST]島に着いたら魚が集まってきて一緒に踊った

[演奏法] タータッタッタ、タータッタとリズム良く。音をよく合わせて

\*最初に聴取者側から出された感想

Aは静かな感じから大きくなり、楽しかったことが分かった。音の大きさの違いがよく分かった。(教師から、違うのは音の大きさだけだったかどうか問いかけがある)吹き方の違いが工夫してあった。喜んで

とんでいきそうな感じ。

(発表者がショートストーリーを説明し、それを聴いた上で改めて演奏を聞く)

**\*感想とアドバイスの交換**

A'は踊りが終わった感じがよく吹けていた。Aはまだ力が出ていない船長がよく分かった、Bは魚が飛び跳ねるのを見て元気になったのが分かった。違う吹き方があるって面白かった。Aは小さくしすぎると変な音になる。Aはよかった、Bは進んでいく感じがしなかった。教師から色々な吹き方が工夫してあったこと、一番工夫したところをもう一度演奏させ、全員へその吹き違いが分かったか、問い掛けがある。

(3) I.& Y.グループ

A:[ST] ちょうでかいマグロを捕まえて陽気になった  
[演奏法] 早く食べようと喜んでランランという感じ。タッタッタのように演奏する。急いで料理しようと思っているから早く吹く。

B:[ST] でかいマグロを刺身にして食べて満腹になった。満腹になったから眠くなり昼寝をすることにした。  
[演奏法] おいしすぎて猛スピードで食べていたが、満腹になったから速い吹き方からゆっくりしたスピードになる。

A':[ST] その全てが夢だった。船長はア〜!という気持ちになった。でも最後は、まあいいやと思った。  
[演奏法] 最初は残念な気持ちだったからゆっくり吹く。だけど最後はまあいいやだから普通の速さに戻る。

**\*最初に聴取者側から出された感想**

普通の速さからスピードが上がっていったから、疲れていたのが元気になっていくのが分かった。速さが変わって面白かった。

(発表者がショートストーリーを説明し、それを聴いた上で改めて演奏を聞く)

**\*感想とアドバイス**

夢だったのでガーン!とした感じがよく伝わってきた。がっかりした感じがよく分かった。(教師から吹き方への問い掛けがある)工夫してあった。跳ねる感じがよく分かった。ストーリーがよく分かった。(教師からどの部分が一番気に入ったのか問い掛けがある)

(4) S.& R.グループ

A:[ST] 旅に出るから嬉しくて踊っている。

[演奏法] R君が先、S君が後からタッタッタッタ、タッタッタ (輪奏)

B:[ST] 船の中で疲れて眠っている。

[演奏法] ターターターを遅く

A':[ST] 一日が始まって楽しいな。

[演奏法] R君が先、S君が後からタッタッタッタ、タッタッタ (輪奏)。速く。

**\*最初に聴取者側から出された感想**

曲の出だしが合っていてよかった。S君が後から追い付いてくる所で、船長が魚に追い付いていく感じがした。よかったけど、バラバラで分かりにくかった。(発表者がショートストーリーを説明し、それを聴いた上で改めて演奏を聞く)

**\*感想とアドバイス**

2回目のBはぐっすり寝ている感じでよかった。Aは分かりにくかった。輪奏は考えていなかったからよかった。教師からなぜ輪奏にしたのか問い掛けがあり、踊りが長くなると思ったからという回答がある。

3. 1. 3 授業実践の分析と考察

授業の印象としては、子どもが考えた演奏を発表する際に教師とその発表者との間だけでやり取りして進めるのではなく、絶えず意見をクラス全体へ投げ返し、みんなの意見として集約しながら進めるように配慮されていた。これにより発表者の意見を改めてみんなで考えてみる、つまり子ども同士の意見のすり合わせによってクラス全員の「共通理解 (共通認識)」を形成することができ、個人の思考プロセスだけではなくみんなで考えるという集団による思考プロセスも経た授業展開を図ることができた点に注目したい。

また議論のポイントを焦点化したことによって、例えば「単なる感想」、「演奏表現に関わる意見」、「音楽表現に関する意見」、「工夫した点」、「演奏者へのアドバイス」等のように話し合いのステップを細かく設定して活動を構造化することができた為、形成的な評価も行い易くなったと考える。現実的な問題として見た場合、本実践のように音符の連なりや楽譜から子ども達自身に何かをイメージさせそれを深めさせることは難しいのだが、先行研究でも触れた通りこの活動や能力とは音楽の基礎・基本の力に関わる重要なポイントでもある為、それについて再度ここで整理し記しておきたい\*7。元々、生物としての人類が最も原初の段階では単に生き残る為にだけ身に付けて発達させた音の性質を聞き分ける能力を、後に人類の発達に伴って徐々にそれを楽しむようになり、そこに喜怒哀楽を感じたりそれを用いて感情表現を試みたり、さらに後には音を音楽として楽しみ、最終的にはその音と音の組み合わせに特別な価値観、つまり芸術やアートとしての価値観を見出すまでに至った長い歴史、要するに人類が音を知覚・認識し、それを意識化し、音を楽しみ、尊び崇めるようになった音楽の発達史を、実体験を伴ってバーチャルに体感し追体験することができるのが、正に本実践のようなクリエイティブな音楽活動であると考えている。

さらに、本実践はリコーダーの細かい技法を指導する以前に実施されたにも拘わらず、子ども達自身の工夫の中で、実際に音を出してみるという実体験を通じ

て自らレガート奏法やタンギング等の基本奏法だけではなく息の強さと強弱、ピッチ、音色との関係にまで気づき、それを活用して音楽表現を試みていたことを特筆したい。これは、それまでの普段の授業や様々な形での音楽活動等、日常生活のあらゆる場面に於いて子ども達一人一人の「耳」が養われてきたことが、そのバックボーンとしてあった為であると推察される。事実、この小学校区では地元の人々による野鳥の会の活動が盛んで、多くの子ども達はその活動へ参加し、野鳥のさえずりに耳を傾ける活動を体験している。

また今回のように「子ども達の自分なりのイメージング→演奏上の工夫への繋がり→互いに聴き合い、アドバイスし合う」という形で授業を進める場合、子ども達に演奏に対する拘りを抱かせたり、単なる他者の模倣だけではない演奏のオリジナリティを獲得させることに苦勞する場合が多いが、二人組の練習時に教師からの「どんな風に演奏したいのか？その吹き方で一番言いたいことは伝わったのか？」等の問い掛けにより、子ども達は自分なりのペースでイメージングを進めることができたものと考えられる。特に、子ども達が積極的に自分の抱いたイメージを言語化しようと試みていたことに注目したい。これは前述した通り、子ども達がこの小学校区で盛んな野鳥の会へ参加し、野鳥のさえずりに耳を傾け、それを言葉（擬音語）へ置き代えて聞き取り、書き記すという活動を体験していた為であると考えられる。

そしてお互いに聴き合う発表の場面でも「自分達も同じことをイメージングした→どうしてそういう吹き方にしたのか？→それならこっちの方がいいと思う→でもこうゆう風がいいと思ったから、それでいいと思う」のように、聴取者側の子ども達からも自分自身の工夫や体験に基づいた活きた意見や感想を引き出し、敢えて二つの意見をぶつからせて揺さぶり、子ども達によるすり合わせを誘発するように巧くコントロールされていた。これにより聞き手側と演奏者側の意見の絡み合いも活発になり、子ども達の相互評価が彼ら自身によってダイナミック化されていた。これは今後他の様々な分野の曲や演奏を聞く際に、単に受け身的に聞き流してしまうようなネガティブな聴き方ではなく、自分の目線からポジティブに耳を傾けるような姿勢を養うこと、つまり鑑賞のモラルの発達にも繋げていけるものと考えられる。

さらに、子どもから出された様々な意見をその都度表現に係わるもの（強く／弱く、やさしい、はずんだ、眠そう、ウキウキ、等）と、演奏技法に係わるもの（タンギング、音が大きい／小さい、速い／遅い、等）へ適切に整理してから、その子どもの意見として再度クラス全体へ返していた点も評価したい。

しかし本実践で最も注目したい点は、教師の説明の前に曲がA-B-A'の形式であることに気づき、それに

対応させたイメージングによりショートストーリーを創っていた点である。これらは通常鑑賞の分野で取り扱われることが多いのだが、日常の授業に於いても演奏と鑑賞を巧くリンクさせた実践が継続されていることを窺わせた。

よって、このような子ども自身が考えるという行為を細かく積み上げて自らの力で曲に対するイメージやその演奏方法・演奏技術を工夫させるような、子どもの思考プロセスを経た活動を保証することにより、従来見られた教師が一方的に言語・非言語指示で演奏をリードした結果として子ども達が思考停止状態や指示待ちの状態に陥ってしまうようなことを避けることができたものと考えられる。

### 3. 2 中学校3年生を対象にした磯部氏による授業

次に、磯部妙子教諭が行った中学校3年生を対象にした合唱曲「名づけられた葉」の授業について分析と考察を行う。この授業も事前によく研究・計画され、研究授業は生徒との間の深い信頼関係に立脚した活気に満ちた実践であったが、今回の研究では敢えて分析的・客観的な視点からのみ掘り下げていきたい。

このような生徒自身の活動を主体とした授業では活動に見た目の盛り上がりを作りにくい為、従来型の授業を指向する教員からは評価を得にくい場合もある。しかしこの活動では単に教師の言語・非言語的指示に従って曲を歌うだけでは得られない、生徒自らがイメージングを通じて音楽に向き合っていくような思考プロセスを重視した主体的な活動体験を期待できる。研究授業に於いてこれに取り組まれたことを高く評価したい。なお紙面の都合上、授業の内容については必要な部分しか記述できないので、ここに記した以外の詳細については授業者が執筆した研究集会紀要を参考にされたい\*6。

#### 3. 2. 1 授業の設定

(1)題材：合唱の喜び：合唱曲「名づけられた葉」

(2)題材の目標

- ・美しい響きのハーモニーを体感し、合唱する喜びを味わうことができる。

- ・パート練習や合唱練習に課題を持って取り組むことができる。(意欲・関心・態度)

- ・曲に合った発声法で響きを感じながら歌うことができる。(表現の技能)

- ・音と音とのかかわり合い(音色・リズム・旋律・和声)、速度、強弱の働きを感じ、曲にふさわしい歌唱表現を工夫することができる。(音楽的な感受や表現の工夫)

- ・曲想や諸要素の働きによる効果を感じながら、合唱を楽しむことができる。(鑑賞)

(3)本時の学習ポイント：パートの中でフレーズを生かした強弱の付け方を工夫し、合唱発表の場でお互いに

聴き合い、バランスのとれたハーモニーの美しい合唱に作り上げていくことができる。

#### (4) 評価

- ・パート練習でフレーズを生かした強弱の付け方を工夫できたか。
- ・発表の場でお互いの合唱を聴き合い、バランスの良いハーモニーを作ることができたか。

#### (5) 本時の視点

自分達で高め合う合唱にする為に「パート練習」「グループ発表」を設定したことは、有効であったか。

(6) 準備する物 (教師) : 「名づけられた葉」模唱CD, パート練習用テープ

(7) 準備する物 (生徒) : 書き込み用楽譜

(8) 対象生徒: 愛知県額田郡幸田町立幸田南部中学校3年2組38名 (男子18名, 女子20名)

(9) 研究授業実施日: 平成16年2月13日

指導計画では、既に学習した歌詞の言葉に着目した追求やイメージに沿った歌い方を工夫する活動を基にして、自分達が考えた曲想を自分達の方法で表現できるようになることをめざしていた。実際の活動は、クラス全体で活動の方向を確認した後、まずパート練習によってそれぞれ自分達の思いが表現ができる歌い方を工夫させ、それを二つのグループに分けて発表させてアドバイスを交換し合う形で進められた。それらの活動の中では、仲間とともに歌詞に基づいたイメージングに沿った表現方法を考えたり、それを表現する演奏方法を工夫したり、それらをクラス全員で共有する楽しさも体感できるように配慮されていた。

### 3. 2. 2 授業の概略と注目したいポイント

授業は大まかに次のような流れで進められた。なお筆者が注目した活動や指導には下線を加えている。

- (1) 既習曲を全員で合唱する
- (2) 強弱記号を全て抜いた楽譜を黒板へ貼り付け、生徒に記号を記入させていく
- (3) 前時迄の「気づき」に基づいて、生徒から意見を引き出しては教師が問題点を整理し集約していく。生徒から出される意見は、強弱の不揃い (クレッシェンドも含む) とプレス (フレーズ、まとまりも含む) を指摘するものが多い。

「他のパートと音型が異なる部分 (cf: 伸ばしているパート/リズムを刻むパート) の部分を問題視していた生徒を指名し、指摘した生徒自身の言葉で何が問題なのかを説明させる。

- (4) それを受けて、本時練習する部分を限定し、そこを具体的にどのように歌えばよいのか、何人かの生徒と教師の間でポイントになる部分について意見を交換する。それを一つ一つクラス全体へ問い直す形で意見を整理し集約していく。

(5) 大まかな表現の方向が決まったところで、教師が練

習するポイントを具体的に「強弱、曲のまとまり (フレーズ感とパート間のバランスも含む)」の二つにまとめ、各パートに分かれてピアノやキーボードを援用しながらアカペラで歌えるように練習させる。

(6) 教師は各パートを回って「どのように歌いたいのか? その為にどんな工夫しているのか?」等を問い掛け、生徒を揺さぶっていく。

生徒は強弱だけではなくピッチやプレスについてもお互いに注意し合いながら練習している。教師は必要に応じて発声についても注意を促す。「こえだに」の部分の歌い方について)

(7) 二つのグループに分けてアカペラ合唱で発表させる。聴いている側に感想を求めてそれを歌った側へ返したり、教師がコメントを挟んだりしながら、問題点を明らかにしていく。

聴いている側も気づいたことを頻繁に自分の楽譜へ書き込み、自分自身の「my楽譜」を作り上げている。

発表された意見と関連する「気づき」の記述も紹介し、それを記した生徒へ振って生徒自身の言葉で説明させ、意見のチェーンを巧く繋げていく。

必要に応じて、指摘された部分だけを何度も歌わせ、全員でその問題点を体感させ、共通理解へ持っていく。

活動中に問題意識が薄れると、その都度「今は何をやってたんだっけ?」と全員へ問い掛け、練習のポイントを再び焦点化し、再認識させる。

次の新たな課題の方向性が見えてきたところで発表グループを交代させる。両グループの発表場面を通じてそれぞれの生徒から出された意見のポイントを、次の3点にまとめておきたい。

- ・音符の長さを大切にする (四分音符, 八分音符)
- ・歌詞がくり返される部分の歌い方 (強弱, クレッシェンドとデクレッシェンド)
- ・バランス (全体の強弱とパート毎の強弱の関係)

(8) 最後に教師自身が楽譜からフレーズや曲のまとまりをどのように読みとったかを説明しながら、歌い方について専門的なアドバイスを行う。(cf: 小さいフレーズがくり返されるうちにmp→mf→fと大きなフレーズに繋がっていくことを説明)

それに関連して、歌詞とも結びつけて曲の雰囲気やイメージングし、自分なりのイメージを持って歌うことの大切さについても触れる。

(9) 教師も含めて全員で全曲を合唱して授業を終わる。

### 3. 2. 3 授業実践の分析と考察

この種の実践では、生徒が活動の目的を把握できないまま自由に歌っただけで終わってしまうケースが見られるが、今回の実践では(5)で行われたとおり「この部分をどんな風に歌うのか考える」というように活動のトピックを限定していた為、それをめざして積極的にイメージングしたりそれを表現する方策を模索する

ことができたようである。

また(6)のように、単に自分達の範疇内だけでイメージさせるのではなく、適宜教師から楽譜上の記号が表現を考える際の方向性を制約したりヒントにもなることがアドバイスされていた為、独りよがりの勝手な想像だけで音楽が組み立てられることも避けられた。このように生徒のイメージングを触発するだけではなく音楽的な知識に関するレディネスの構築も確保されており、適切にプロセスを踏んで授業を積み上げるように配慮されていると感じた。今後さらに、生徒と音楽の専門家である教師との間で曲のイメージングを媒体とした様々な掛け合いを行って表現技法や演奏技術にも目を向けさせると、より高いレベルを志向した授業の構造化が図れると思われる。

また(7)のように、グループ練習において生徒同士が盛んに意見を交換したり楽譜に気づきを書き込んだりすることによって、グループ全体での共通理解を形として表したり、発表時に「何をどのようにしたくて、どんな工夫をしたのか」という練習経過のポイントを教師が丁寧に反芻することによって、問題意識がクラス全体で共有されるように配慮されていたことも評価したい。もしこの共通理解や共有化をないがしろにしたままで活動がくり返されると、生徒に「イメージング＝直感的な演奏」と誤解させてしまい、さらに「即興演奏＝勝手に思いつくままの演奏」という誤った考えまで抱かせてしまう危険性を否定できない。「自由と勝手は違う」ことをきちんと押さえておきたい。またこの作業を丁寧に積み重ねることは、結果として生徒が積極的に自分の演奏を工夫しようとしたり、他者の演奏を聴く際に自分の目線でポジティブに聴こうとする鑑賞のモラルを養うのに有効な一方策にもなり得ると考える。

さらにポイントを絞って具体的に分析を進めてみたい。まず練習の際には、これまで学習してきた合唱体験を活かして生徒一人一人が問題意識を持って歌うように、絶えず教師から働きかけが行われていた。その結果として(3)のように「前時迄の気づき」の中で、表現や表情、表現の方法について記述した者が少なくなかった(14人/38名中)。中でも強弱やパート間の強弱バランスに拘りを持つ生徒が11名あり、具体的に楽譜の36小節から38小節にかけて頻繁に強弱が変化する部分と明確に示して問題視した生徒も5名いた。

これを受けて(4)では練習の目的をこの部分の歌い方、特に強弱の変化を如何に表現できるのか?というように焦点化し、その表現方法の工夫を課題に設定している。しかし、練習の全てを生徒へ丸投げしてしまっている訳ではなく、(2)のように授業の冒頭で標記記号を抜いた楽譜へ生徒に強弱記号を記入させ、それを全員で確認することによりパートごとに強弱記号がどのように変化し組み合わせられているのかを、まず「視

覚的」に確認させている。

この標記記号とは、速度記号やフェルマータ等の演奏上の条件を明確に指示した「規制サイン」と、演奏上のヒントとも言える表現上の「発想サイン」とに分けられるが、今回取り上げている強弱記号はその両面を併せ持つものである。その為、楽譜のその場所へなぜその強弱記号が書かれているのか?作曲者の意図を楽譜や歌詞、曲の構成等から探り、その強弱記号が何を求めたものなのかを紐解いていくプロセスが必要になる。なぜなら同じpでも単純に小さく弱い声で歌うだけではなく緊張感をもったpや優しい感じのp等、その場所その部分にふさわしいpの演奏方法が多様に考えられるからである。多くの授業では「p＝小さい音」と知識の問題として片づけてしまい、教師が一方向的にリードすることで通り過ぎていく場面が見られるが、本実践では(6)のように練習をくり返す過程においてその重要さに気付かせ、解決方法や歌い方を模索させるような所謂演奏のブラッシュアップを生徒自身の力で体現させていたことにも注目したい。

またグループ別の演奏発表と意見を交換する場面では、(7)のように生徒の発言がチェーンで繋がっていくように「今、発表演奏の何について聴くのか」聴くポイントを明確に示して、「今、自分達は何を問題にして、どんな工夫を試みているのか」発表練習のシチュエーションを全ての生徒にしっかり把握させ、生徒が無意識の内にてできてしまっていることも含めて、自分達の演奏上のポイントを再認識させたり追体験させることで、それをクラス全体の共通理解にまで持っていくように配慮されていたことを評価したい。このような活動を積み重ねることにより「自分達はこういう雰囲気であって歌いたい」というような、より具体的なイメージングが各グループで行われ、自分なりのイメージを膨らませて歌うことやそれを他者と共有することを楽しんでいる生徒も少なくなかった。さらに「その雰囲気を出す為にはどういう風に歌えばよいのか」等、具体的に歌詞をイメージングしながら試行錯誤をくり返す様子も見られた。

このような実体験を通じて思考プロセスを積み上げていく活動を通して、音楽の様々な概念に気づき、知り、そしてそれを表現する為の演奏技法を身に付けようとするモラルや能力こそ、現在のユビキタス化された社会で必要な音楽の基礎・基本の力であると考えられる。また、しばしば合唱の授業において曲趣に応じた演奏を工夫させることがあるが、往々にして形だけの表現や一部の生徒のイメージの押しつけに止まってしまい、クラス全体で自発的に考えようとする意識を持たせる段階まで持っていくことは難しい。よって本実践のような「まず生徒一人一人が自分なりにイメージングし、それを他者と融合させる」活動とは、音楽経験が少ない生徒へ音楽表現や演奏表現の大切さに気付か

せる場面においてより効果的であると考えられる。

また(5)のようにグループ練習と発表をアカペラ合唱で行わせたことで、ピアノの伴奏に頼ることなく自分達自身の演奏表現だけで曲を作り上げたり、音程やハーモニーの響きにも注意し、音程感覚やハーモニー感を大切にするモラルの醸成にも効果的であったと考えられる。アカペラ合唱は扱いにくいのだが、敢えてこのような体験を積み重ねたことにより少しずつ生徒の耳が養われてきたものと推察される。

しかし最も特筆したい点は、活動の主体を生徒側へ置き生徒自身の目線とペースで「曲創り」が行えたことと、(8)のように教師も生徒と同じ目線に立って話し合いながらも必要に応じて音楽の専門的なアドバイスをを行うことにより、従来型の教師が一方的に言語・非言語指示で演奏をリードする活動や逆に放任的な活動で見られるような、子ども達が思考停止状態や指示待ちの状態に陥ってしまわないよう巧くコントロールされていたことである。

ただ今回の実践において残念だったことは、他の多くの合唱指導と同じようにパート別の斉唱練習からいきなり合唱へ移行していた点である。線としての斉唱を組み合わせることにより結果的に合唱になるのではなく、一つ一つの音符において音のタテ線の「ハモリ具合」や和音の響きを丁寧に確認し体感させる方が、生徒のハーモニー感の発達の面からはより有効であったと考えられる。

また歌曲を題材にしている以上、やはり生徒に「詞と詩」の違いをきちんと理解させてから、「詞→朗読→ドラマ化(表現化)→歌唱」へと繋がる細かいステップを丁寧に押さえた活動を積み上げることができれば、より高いレベルに於ける授業の構造化だけではなく、形成的な評価も視野に入れた授業展開が可能になったものと考えられる。

なお最後に、本研究の分析とは直接関係ないのだが、高校入試を目前に控えて精神的にも落ち着きにくい時期に、気負うこともなく「普段着」での素晴らしい授業を披露してくれた生徒諸君を高く評したい。

#### おわりに

今回の一連の研究は、筆者が参加する機会を頂いた研究会において実施された研究授業を対象にして、筆者が企図する「イメージングを通じて音楽の基礎・基本の力に気づき、知り、身に付ける」という視点から分析と考察を試みた。本論文で取り上げていない他の有意義な授業実践については、拙著において紹介しているのでそちらを参照されたい\*7。

今後、教育の分野においてもますますユビキタス化が進み「いつでも、どこでも、誰でも」できる便利さだけがより強調され、清濁・良否両面の影響が及んでくると推察される。このような社会だからこそ

「イメージングとそれに付随する力」が重要な音楽の基礎・基本の力の一つでもあり、また音楽が与しつづける「生きる力」でもある、と考えている。よって今後も、少なくとも生身の人間と人間が触れあう小学校や中学校の音楽科の授業においては「自らイメージを膨らませ、イメージを形成する」ことによって子どもの思考プロセスを刺激し、その活動を通じて音楽構成要素にも自ら気づき、それを知り、それについて考え、その技術を身に付けていきたいと感じるような授業、つまりバーチャルな疑似体験だけでは成し得ない自らの実体験を通じたイメージングを誘発するような実践を模索していきたい。

最後になったが、授業研究会に参加させて頂く貴重な機会を提供して下さいました愛知県額田郡教育研究会の先生方へ謝意を表したい。また本論文において分析と考察の対象に取り上げさせて頂いた今泉美貴子教諭と磯部妙子教諭へ、その非礼を詫言るとともに深く感謝したい。

#### [注、及び引用]

- \*1 特集「科学で解明するココロの健康ウソホント」、日経トレンディSeptember,2004, No.231, 日経ホーム出版社
- \*2 小泉英明氏は日立製作所基礎研究所でフェローを勤めている
- \*3 ジェーン・ハーリー 著、西村弁作・新美明夫訳、「滅びゆく思考力～子ども達の脳が変わる」、大修館書店, 1992
- \*4 音楽の構成要素：音の3要素は音高、強弱、音色、音楽の3要素はメロディー、リズム、ハーモニー
- \*5 この授業研究会は、額田郡教育研究会が主催して平成16年10月14日に幸田町民会館と幸田町立図書館で開催された「平成16年度額田郡教育研究集会」の指定教科に音楽科が選定されたことにより、平成15年から2年間に亘り額田郡内の小学校・中学校の音楽科教師によって組織された額田郡教育研究会第5研究部(音楽部)によって行われたものである。筆者はこの授業研究会へ参加する機会を頂いた。(音楽部長：小林國良、副部長：山口竜也、主任：田境里美、太田円、専門委員：石黒佳子、磯部妙子、今泉美貴子、近藤今日子、判治朱里、平木順子。研究主題「音楽だいすき！子どもが生き生きと取り組む音楽の授業、—水平的な広がりのある授業のあり方を考える—」)
- \*6 「平成16年度額田郡教育研究集会研究要項」、額田郡教育研究会, 2004
- \*7 拙著、「ユビキタス化された社会における音楽の基礎・基本の力の問い直しと、子ども自身の思考プロセスを重視した授業実践の模索—イメージングと授業の構造化を視点とした分析とその考察—」、愛知教育大学研究報告第54号, 愛知教育大学, 2005